

特

別企画

りんくうにおける

多職種連携の現在

検査科統括主幹

花田浩之

りんくう総合医療センターでは医療を進めるにあたり医師・看護師のみならず、多職種の医療技術者が活躍しているが、「多職種連携」はまだまだ工夫が必要と思われる。医療技術者の専門性ならびに所属意識を高め、モチベーションアップおよびスキルアップを図ることで、病院経営へ主体的に参加し、効率的な病院運営、患者サービスの向上ならびに地域医療の効率化に寄与できるよう努めていきたい。検査科ではスペシャリストを育成しながらジェネラリストを養成し、幅広く対応できるように切磋琢磨していきたいと思えます。今年の4月より検査情報室(LI)を新設し、検査に関する情報発信と問い合わせ窓口業務を行ってまいりますのご利用ください。

医師支援秘書主任(消化器内科) 末永裕生

当センターに医師支援秘書(以降DS)が配置されて、約10年が経ちます。訳の分からない新参物は、時を経て、無くてはならない存在へと成長いたしました。

私たちDSの主たる役割は、医師の事務的部分を担い、医師と患者、医師と他職種との架け橋になる事です。先生方には、医師本来の業務に専念していただくことで、患者数の増加、手術件数の増加、そして経済的効果へと繋がると思っています。

現場では看護師・クラーク・DSによるコメディカルカンファレンスが行われ、あらゆる問題点を各立場で取り上げ相談しています。それにより、職種を超えてカバーしあう事もあり、お互いの作業内容の理解が深まりました。

多職種チームでの作業は、基本となる個の価値を高め合うこと、達成感や相互協力、モチベーションアップに繋がっていくと思えます。

リハビリテーション科技術科長代理

津野光昭

今日の医療では、患者様に関わる様々な職種が連携し治療や療養のサポートを行うことが重要視されています。当院のリハビリテーション科でも、多職種連携を行い質の向上に努めています。また呼吸、栄養、疼痛緩和、認知症を専門的に診察する院内サポートチームにも積極的に参加することでより良い医療の提供に努めています。

今後の展望として、院内や院外での講習会等に積極的に参加し、スタッフの専門性を更に高めることで各科医師や多職種との連携をさらに密に図ると考えます。そうすることで患者様の病態に応じた質の高いリハビリテーションが提供でき、患者様の生活の質(QOL)の向上に繋がると考えています。

メディカルスタッフの活躍と多職種連携の推進

看護師 8階山側病棟 藤田有可

8山病棟に入院される患者の多くは、病気の完治が難しく、退院後も継続的な治療が必要となります。患者・家族のほとんどは自宅へ帰ることを目標としています。困難な場合もあり、退院支援への取り組みは病棟看護師として重要な役割の1つであると認識しています。治療や看護の継続だけでなく、心理的・社会的問題を解決するためにも、多職種連携を行い、その患者にあった資源の提供を行うことが必要となります。

患者・家族が不安なく自宅へ帰るために、MSW(医療ソーシャルワーカー)やケアマネジャー、訪問看護師等と情報を共有し、病院と自宅双方での生活状況の把握を行うことで、地域全体での患者支援が行えるよう日々取り組んでいきたいと思えます。

薬剤科主幹

中川直樹

近年、「質が高く、安心で安全な医療」が求められています。しかし、医療は高度化や複雑化し、業務が増大することで医療現場での疲弊が増えています。こうした状況を変えるため、「チーム医療」が推進されています。

当院でも薬剤師は「チーム医療」に参加すべく、病棟に赴いています。診療科のカンファレンスに参加し、患者さんの状況や治療方針を確認しています。また薬剤師の視点から薬物療法の経過を確認し、適切に薬剤が使用されているかなども把握することに努めています。

最近では新薬だけではなく、後発医薬品の種類も増加しており、薬剤に関する幅広い知識が必要で、薬剤師は「チーム医療」に薬の専門家として参加し、薬物治療において「安全性の確保」に努めることが大事であると私は日々感じています。

放射線技術科統括主幹 行正剛

RGM(りんくう総合医療センター)に携わるスタッフは1000人を超えています。この1000人にはそれぞれの個性があり特技や趣味を持っています。私たちが行う日々の業務の中、必ずと言って自分の領域を超える難題に直面することがあります。その際、1000人の特技・趣味が難題を突破できる手掛かりになることが多分にあると私は考えています。そのためにもスタッフの皆さんにお願いしたいことがあります。

「このことなら私に聞いて」と自分の特技・趣味を他のスタッフに自慢してほしい。皆はその情報をもとに難題にぶつかった際には、その誰かに手助けをお願いしてほしいのです。難題をそのままにせず、皆で乗り越える組織創りを願いたい。職種や上下関係を超え難題に立ち向かえるRGMCになつていかなければと思っています。

臨床 床工学科技術主査 奥田重之

当院における臨床工学技士の業務領域は年々拡大の途を辿っています。他科からの要望や科員の増員を経て、多職種との連携を含めた様々な業務に取り組みしております。2014年より当直業務を開始し、院外からの救急搬送、院内での急変時の対応、特に循環動態が不安定な患者様の補助循環装置導入に立ち会っております。呼吸領域では院内の呼吸サポートチームの一員として、呼吸器を使用している患者様の設定調整や早期抜管への助言を行っています。血液浄化領域では集中治療室や血液浄化センターにて装置の準備から開始、終了に携わっています。

また透析患者様のシャント血管のエコー検査や記録を医師と連携して行い、近隣施設に提供しています。災害拠点病院の職員としてDMAT、JHATといった災害支援の隊員取得や、近隣の透析施設の皆様と平時より連携を構築し、災害時の協働体制が円滑に行えるように取り組んでいます。

総務課参事 田村英登

異なる専門性を持った様々な職種が集まる医療機関において、多職種がそれぞれの専門性を発揮していくことは言うまでもなく、多職種間の連携を密にし、それぞれ共有した目標に向け協働し、互いに補完しあいが医療を提供するなど「多職種連携の推進」が求められています。

自職種に責任感を持ち、役割を全うする中で他職種の役割や異なる視点などを理解し、知識・意見・価値観などを伝え合い「コミュニケーション」を図り、相互理解を深めることが大切であり、多職種連携を推進させるためには欠かせない要素だと思えます。

今後、福利厚生事業も活用しながら多職種間の相互理解を深める機会や場を広げ、円滑なコミュニケーションを図れる職場環境の構築や多職種協働の活性化にもつながればと思えます。